

養護教諭の取り組みと課題

— 管理的立場にある養護教諭の調査から —

An Action and Problem of The Yogo Teacher (School Nurse)

— From The Survey by Yogo Teacher (School Nurse)

Who is in An Administrative Position —

大塚 朱美・梅田 君枝・市原 真穂・石津 みゑ子・池邊 敏子

Akemi OTSUKA, Kimie UMEDA, Maho ICHIHARA, Mieko ISHIZU and Toshiko IKEBE

目的：A地区の養護教諭の取り組みの質向上に向け、養護教諭の取り組みと課題を明らかにすることである。

方法：A地区の高等学校の管理的立場にある養護教諭5名(理事2名、委員2名、研究主任1名)にインタビュー調査を行った。

結果：A地区の管理的立場にある養護教諭が明らかにした、一般的な養護教諭として共通の取り組みは、【地域特性・メンバー特性を熟知している中での活動】を強みとし、【一人配置による課題を一人で抱えない工夫】をしながら、全校生徒に対する観察など【些細な変化を意識した活動】であった。課題は、校内では【専門的な発言による対応】、健康課題によっては【外部資源との連携が大事】であった。また、多様な学校での取り組みは【限界・不安を感じながら役割意識を自覚しての活動】であった。管理的立場にある養護教諭としての取り組みは【地区内リーダーとしての努力】であり、課題は【養護教諭の質の向上を期待】や【研究への負担感/前向きな姿勢(両価的な思い)】であった。

結論：A地区の管理的立場にある養護教諭が明らかにした養護教諭の取り組みは、顔見知りの同僚の存在や地域特性に精通していることを強みとして、1人配置という職制により多様な人との連携を意図的に行いながら、医療保健と教育の2つの役割から些細な変化を意識した広い観察と対応を怠りなく行っていた。課題は、専門職としての判断や中心となつての対応に迫られる、外部連携の困難さ、養護教諭が不在時の対応や体制の不備、課題解決のための外部環境調整には限界があることが明らかとなった。また、管理的立場にある養護教諭の取り組みは、地区内情報の共有を重視しながら他組織との連携を行い、地区の活性化やメンバーキャリアや時代に合った研修企画を行っていた。課題は、日々の取り組みを研究につなげたり、専門性を深めたりという養護教諭の質の向上を期待し、研究を推進し研修会を企画したいという前向きな姿勢と、様々な現実の困難から研究への負担感という両価的な思いがあることが明らかとなった。

1. はじめに

子どもを取り巻く社会状況の変化に伴い、多様で複雑化した子どもの健康課題に対し、中央教育審議会では、

連絡先：大塚朱美 aotsuka@cis.ac.jp

千葉科学大学看護学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Nursing,
Chiba Institute of Science

(2015年9月30日受付, 2015年12月25日受理)

平成19年に文部科学省から諮問を受け、学校における健康・安全に関する推進体制の構築について審議がなされた。平成20年に発表された答申において、学校保健の充実を図るため、養護教諭の専門性を学校保健活動全体に生かす環境整備の重要性が述べられている¹⁾。その方策には、養護教諭を中核とし、学校内外の関係者と連携・協力を図ること、学校保健も重視した学校経営を担保する法制度の整備、保健指導を適切に行い得る体制の確立、教員養成段階における教育及び現職研修の充実、

養護教諭の複数配置の促進などが提言されている。その流れを受けて、学校保健法（昭和33年法律第56号）の一部改正が行われ、学校保健安全法（平成20年法律第76号）により、養護教諭やその他の職員と連携した健康観察、健康相談、保健指導、学校と医療機関等との連携が新たに位置付けられた。文部科学省は、「教職員のための子どもの健康相談及び保健指導の手引」²⁾を作成し、養護教諭と連携し、教職員が子どもの健康相談に取り組めるよう分かりやすく具体策を提示している。

「公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律」で定められている養護教諭等の数は、生徒の収容定員が81～800人の全日制課程、121～800人の定時制課程に一人、特別支援学校では61人以上に一人である。全日制課程の各校あたりの生徒数は平均約670人であり³⁾、多くの学校で養護教諭は一人配置である。養護教諭の職務実態と自己評価に関する先行研究⁴⁾では、養護教諭が自らの役割を果たすために職業的自律性の確立が必要であり、自己評価が重要であることを示唆している。また、熟練した養護教諭が行う養護診断や対応に関する研究⁵⁾では、早い段階で子どもの問題を予測し、情報収集や対応、連携を行っていると報告している。学校保健の充実に向けて、急速に法制度や環境改善が図られる中で、養護教諭は子どものケアの質を高める中心的役割を担う立場にあり、取り組む実践課題は増加し、対応策を模索していると考えられる。実践経験が豊富で管理的立場にある養護教諭の取り組みと、直面している課題を知ることは、子どもの支援体制の強化ができると推測される。

2. 目的

A地区の養護教諭の取り組みの質向上に向け、養護教諭の取り組みと課題を明らかにすることである。

3. 方法

3. 1 研究デザイン

質的帰納的デザイン

3. 2 調査時期

平成26年10月16日～10月30日

3. 3 対象者

A地区の高等学校の管理的立場にある養護教諭 5名
管理的養護教諭とは、A地区の高等学校の養護教諭の中で、他組織との連絡や調整、A地区の取りまとめや研究推進を担っている養護教諭を意味する。

A地区では概ね20名の養護教諭が属し、地区の理事や委員は地区の管理的役割を果たす。

3. 4 調査方法

半構造的面接

面接には、インタビューガイドを作成し用いた。インタビュー内容は録音し、逐語録に起こした。

3. 5 調査内容

インタビューガイドに以下の内容を含めた。

- ・地区の特徴（特性や強み）
- ・管理的立場の養護教諭が大事にしていること
- ・地区を維持・発展させていく時の管理的立場の養護教諭の課題
- ・課題解決のための考えと実践上の気遣い

3. 6 分析方法

質的帰納的分析

逐語録を繰り返し読み、語りの意味内容を損なわない程度にデータの切片化を行い、対象者の言葉や言い回しを利用してデータをコード化した。コードを類似する特徴や性質で集めたものをサブカテゴリとし命名し、更にサブカテゴリを類似する特徴や性質で集めたものをカテゴリとし命名しカテゴリ化を行った。さらにカテゴリを類似する特徴や性質で集めたものをグループとし命名した。これらの分析過程において、真実性、信用性が確保できるよう、メンバー間で解釈が一致するまで話し合いを重ねた。

3. 7 倫理的配慮

対象となる養護教諭に研究の趣旨を説明し、同意した各養護教諭から当該校の管理職の承認を得た。面接の前に、文書で研究の趣旨、得られたデータは本調査の目的以外で使用しないこと、学校名や個人が特定されないことを説明した。また面接当日に再度、口頭で研究の趣旨、得られたデータは本調査の目的以外で使用しないこと、学校名や個人が特定されないこと、途中で研究に協力できないと思えば中止できること、質問に答えられなければ答える必要はないことを説明した。

4. 結果

4. 1 対象者の概要

年齢は40代4名、50代1名、性別は全員女性、教員としての経験年数は全員20年以上であった。養護教諭の配置については、1校に対して1名配置校が4名、2名配置校が1名であった。担当生徒数は、約60名から600名であった。対象となった養護教諭の役割は、他組織との連絡（理事2名）、A地区の取りまとめ（委員2名）、研究推進（研究主任1名）であった。一人あたりのインタビュー時間は平均39分であった。

4. 2 管理的立場にある養護教諭の語りとカテゴリの関係

管理的立場にある養護教諭の語りから、164のコードが得られ、37のサブカテゴリ（以下《 》で示す）から9のカテゴリ（以下【 】で示す）が抽出された（表1参照）。

9のカテゴリはさらに、3つのグループ（以下“ ”で示す）に分類された。以下に、3つのグループに含まれるカテゴリの関係と、サブカテゴリの根拠を示す特徴的な管理的立場にある養護教諭の語りを「 」で示す。

表1. 管理的立場にある養護教諭の語りから抽出されたサブカテゴリ、カテゴリと分類されたグループ

グループ	カテゴリ	サブカテゴリ
グループ1： 一人配置による課題を一人で抱えない工夫特性や強み	地域特性・メンバー特性を熟知している中での活動	一人配置の心もとなさ
		転勤した日から引きうけるという思い
		地区内養護教諭との連携
		養護教諭と上司との連携
		養護教諭と教諭の連携
		養護教諭と学外との連携
	些細な変化を意識した活動	中間層がいない悩み
		顔見知りの協力的な関係性
		地域特性に精通している強み
		救急対応に精通している者が多いという自負
		多角的に考えられる現実の存在
	専門的な発言による対応	小さな取り組みを地道に実施
		些細な変化を見落とさないことが重篤化の防止という体験
		保健室来室者減少時、背景を把握
		来室者の減少に伴う新たな健康課題の発見
		女性徒にハードルの低い保健室という印象
	外部資源との連携が大事	生徒の生活や感じ方の把握に努める
		学校全体に影響することへの専門的な発言の経験
		生徒の健康課題に見合った医療資源が乏しい
		健康管理には小・中・高の連携が大事
グループ2： 限界・不安を感じながら役割意識を自覚しての活動実践の状況		学校の特徴に応じた活動内容の相違
		仕事の限界を感じる
		保健室利用者が多いと重篤な課題見落としへの不安
		養護教諭の役割を意識しながら実践
グループ3： 地区内リーダーとしての努力管理的立場にある養護教諭としての努力や思い	養護教諭の質の向上を期待	理事・地区委員としてブロック内の情報の共有を重視
		養護部会と地区の円滑な関係づくり
		本部職員へのねぎらいの気持ち
		地区内が活性化することへの願望
		地区メンバーのニーズ・キャリアを考慮した研修計画
		時代のニーズに即した研修企画
	研究への負担感／前向きな姿勢（両価的な思い）	養護教諭の質の向上
		千葉科学大学で教員免許更新を受けたい
		災害時の養護教諭の経験を活かし、役割を学びたい
		研究・研修への前向きな姿勢
		小・中・高における行政・専門職能団体の壁を越えた研修の課題
		研究担当の間隔が短い・地域が広くて集まるのに遠方ということで研究の負担感
		研究メンバー・リーダーの負担感

4. 2. 1 グループ1：“特性や強み”

(1).【一人配置による課題を一人で抱えない工夫】

「一人配置で一人取り残されないようにするために、全て漏らさず全員に情報が行き渡るように気を配っている」、「一人配置だとやっぱりどうしても抜けられないことがある」、「新卒の場合は、質問しやすい環境がないと厳しいという思い」から《一人配置の心もとなさ》、「引き継ぎは人がダブらないので、自分なりに考えなくてはいけない」、「ダブりがいいから仕事を学ぶ時に、人のやり方を見て学ばなくて苦労した」から《転勤した日から引き受けるという思い》と一人配置による課題が明らかとなった。また、「地区の健康課題を見つけるのに近隣の養護教諭とのコミュニケーションをとったりしている」から《地区内養護教諭との連携》、「問題が発生したら対応策について教頭とよく相談する」、「管理職につながるように意図している」から《養護教諭と上司との連携》、「定期的に健康課題を教諭に知らせている」から《養護教諭と教諭の連携》、「外部との連携は医療機関」、「カウンセラーとの連携は重要である」から《養護教諭と学外との連携》などがあり、様々な立場の同僚や上司、関係者と連携することを選択していた。このように、【一人配置による課題を一人で抱え込まない工夫】があった。

(2).【地域特性・メンバー特性を熟知している中での活動】

「30代から40代前半が少ないという年齢の二極化」、「世代交代のときに年齢的な偏りがあり、少ない年代層の一人一人の負担が大きい」から《中間層がいない悩み》、「強みと特性は、異動があってもメンバーが変わらない」、「地元出身で結束力が強く、雰囲気柔らかく、助けあったり、教えあったり」、「担当地区は、連携が取りやすい人数配置」から《顔見知りの協力的な関係性》、「異動規模は同じ地区内であることがメリットであるという体験」、「地域在住の養護教諭であり、地域の特性は良く知っている」から《地域特性に精通している強み》があり、地区内では地元出身者のメンバーが地域に根ざし協力し合っていた。また、「この地区は、3分の1の養護教諭が看護師免許を持っており、救急の対応には慣れているという特徴がある」から《救急対応に精通している者が多いという自負》、「4種の実業高校と3校の定時制、通信制もあり、多様な角度から考えられる」から《多角的に考えられる現実の存在》と、このブロックの特性も明らかとなった。このように、【地域特性・メンバー特性を熟知している中での活動】を行っていた。

(3).【些細な変化を意識した活動】

「目標を定めているわけではなく、日々の業務の中でのちょっとした問題を解決しようとした結果として健康につながった」、「取り組み始めたばかりだが、地道に行うしかない」、「多くはないが小さなことから始めている」から《小さな取組を地道に実施》、「慌ただしい保健室の

中で、重篤な生徒を見逃さず病院につなげられた体験がある」から《些細な変化を見逃さないことが重症化の防止という体験》があり、日々学校の中で健康に関する小さなことへの地道な対応を行っていた。また、「そのおかげで、保健室に来ている子が減っているのもあるんじゃないか」から《保健室来室者減少時は、背景を把握》、「今は保健室来室が減り、授業に参加する生徒が増え学校全体が落ち着いて、遅刻も早退も減った」、「落ち着いてくると、新たな健康課題が見えてくる」から《来室者の減少に伴う新たな健康課題の発見》、保健室来室数の減少という変化から生徒の生活や感じ方に対してアンテナを高くし、健康課題の新たな変化への気づきに誤りがないよう取り組む姿勢があった。保健室来室数のみならず、特性について「保健室に来室する生徒は、圧倒的に女子で、まとまってくる子はいつもまとまって、一人で来る子はいつでも一人」から《女生徒にハードルの低い保健室という印象》があり、「ボランティア活動は、盛んに行われている」、「クラス数が減になったデメリットは、部活や行事の負担が大きいこと」、「クラス数が減や少人数授業は、生徒にとっては良いと思う」から《生徒の生活や感じ方の把握に努める》があり、学校全体で起こっていることの把握も行われていた。このように、小さな取組を地道に行うことで【些細な変化を意識した活動】につながっていた。

(4).【専門的な発言による対応】

新型インフルエンザ流行の時期の文化祭初日に複数の熱発者が発生し、「初めての文化祭公開中止や学級閉鎖の判断を迫られて実施した」、「すぐに隔離や帰宅などの生徒への対応を行った」、「校長への発言で、高校ではほとんどやったことのない健康観察を何カ月も続けた」という体験や、「学校では唯一の専門家としての発言」、「教員と専門職としてのジレンマを感じた」、「学校行事に必要な専門職だから絶対に抜けられない」という葛藤から《学校全体に影響することへの専門的な発言の経験》を持っていた。このように、学校で一人である専門職としての発言を行うなど【専門的な発言による対応】を行っていた。

(5).【外部資源との連携が大事】

「コミュニケーションが難しい子が行くところがない」、「つなげる場所が遠くしかない」、「最初から、もうやっぱり二の足踏むという気持ち、ありますよね」から《生徒の健康課題に見合った医療資源が乏しい》という課題に直面していた。また、「養護教諭は小・中・高の長期にわたる健康診断票を預かっている」、「取組みとして近隣の小学校と養護教諭同士の情報交換を始めた」から《健康管理には小・中・高の連携が大事》と認識していた。このように、在籍している学校内では解決しない様々な学校生活上の問題に対し、外部の関連機関との連携が大事と考えていた。

4. 2. 2 グループ2：“実践の状況”

(1).【限界・不安を感じながら役割意識を自覚しての活動】

「進学校は就職に伴う外部連携はない」、「養護教諭がどこまで動けるかは、学校の事情で変わる」から《学校の特徴に応じた活動内容の相違》、「養護教諭がコーディネーター的って言われても、なかなか、どこまで動くか、動けるかの、その学校事情で変わっていくんですね」「養護教諭自身のメンタル面なんかはどうなのでしょうね」「保健室で、見守るような形で話を受け取る、それ以上のことはやっぱり専門職、必要があれば専門職と連携したほうがいい」から《仕事の限界を感じる》、「保健室に生徒がいなくてことが無かったんですね。来ているのに重篤な子供を見落としているんじゃないか」から《保健室利用者が多いと重篤な課題見落としへの不安》を持っていた。また、「教育相談的な面がやっぱり多くなっている」、「医療保健職と教員という2つの役割があるのでプレッシャーを感じている」から《養護教諭の役割を意識しながらの実践》を行っていた。このように、養護教諭の実践の状況は、学校ごとで異なる活動内容に限界・不安を感じながらも、養護教諭としての役割意識を自覚して活動していた。

4. 2. 3 グループ3：“管理的立場にある養護教諭としての努力や思い”

(1).【地区内リーダーとしての努力】

管理的立場にある養護教諭は、所属している地区の理事や委員、研究主任という中核的役割を担う立場にあり、「一番大事なことは正確に本部からの情報を地区の方に流すということ」から《理事・地区委員として地区内の情報の共有を重視》していた。また、「養護部会との連携は理事会があるので、その際に地区の状況を報告したり、ご意見をいただける」から《養護部会と地区の円滑な関わり》、「本部の方々を見ていると、良くこれだけやって下さっているという感謝の気持ちはすごくある」から《本部職員へのねぎらいの気持ち》、「養護教諭は一人で、校内ですぐ相談できないため、地区会議を多くして地区を維持・発展させたい」から《地区内が活性化することへの願望》を持ち、「地区メンバーの意向を汲んで、講師選択や見学先選択をし、研修会を企画することが委員の仕事」から《地区メンバーのニーズ・キャリアを考慮した研修計画》、「技術は時代とともに変わるし、健康課題も変わるので、研修はいつもいろいろやらなければならない」から《時代のニーズに即した研修企画》に取り組んでいた。このように、地区内リーダーとしての様々な努力をしていた。

(2).【養護教諭の質の向上を期待】

「日々の取り組みを研究的に意味のあるものにする」から《養護教諭の質の向上》、「教員免許更新講習を充実さ

せて欲しい」、「教員免許更新講習で養護教諭の専門科目を開講して欲しい」から《千葉科学大学で教員免許更新を受けたい》という希望があった。さらに、東日本大震災の被災時、「校舎内の避難所でのペットアレルギーや生徒の心的外傷の体験を活かしたい」から《災害時の養護教諭の経験を活かし、役割を学びたい》と考えていた。このように、日々の取り組みや教員免許更新、更には災害時なども含めた場面での養護教諭の質の向上を期待していた。

(3).【研究への負担感/前向きな姿勢（両価的な思い）】

管理的立場にある養護教諭として、「担当地区の課題は研究に本腰を入れること」、「今後の養護教諭の組織の発展のためには、養護教諭会の講話は考えなくてはならない」から《研究・研修への前向きな姿勢》を持っていた。しかし、「行政の壁を越えた連携ができると、小・中・高の養護教諭は共通の健康課題の研修会を開きやすくなる」から《小・中・高における行政・専門職能団体の壁を越えた研修の課題》、「3年の研究期間が終わったと思って数年で、また研究のことを考え始めないといけない」、「高校で研究を行うのは、距離的に広いので少なくとも半日は必要」から《研究担当の間隔が短い・地域が広くて集まるのに遠方ということで研究の負担感》、「スムーズにいかないと息苦しさをを感じる」、「研究委員をまとめてブロックの研究としていく兼ね合いが見極められない」から《研究メンバー・リーダーの負担感》も持っていた。このように、研究に対して負担感と前向きな姿勢という両価的な思いを抱えていた。

4. 3 カテゴリーとグループの関係

表1のように管理的立場にある養護教諭の語りから9のカテゴリーは3つのグループに分類され、カテゴリーとグループの関係を図1に示した。

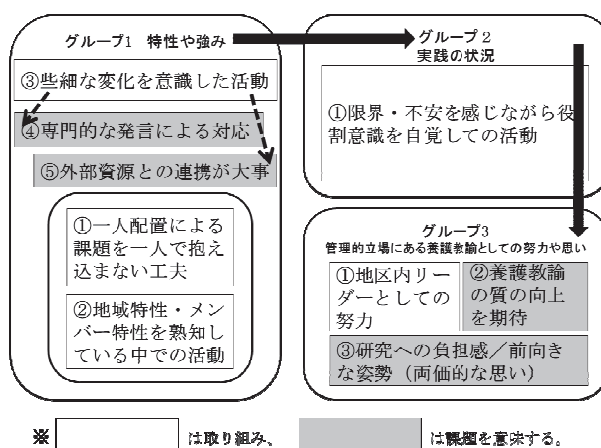


図1. 管理的立場にある養護教諭の語りから得られた取り組みと課題の構造

グループ1は、【一人配置による課題を一人で抱えない工夫】、【地域特性・メンバー特性を熟知している中での活動】、【些細な変化を意識した活動】、【専門的な発言による対応】、【外部資源との連携が大事】の5つのカテゴリがあり、管理的立場にある養護教諭が最も多く語った内容であった。そしてその内容は、地区内の養護教諭の工夫や活動や組織の特性であったため、これを“特性や強み”とした。

グループ2は、【限界・不安を感じながら役割意識を自覚しての活動】の1つのカテゴリであり、その内容は、養護教諭の活動に伴う様々な現状や葛藤、不安であったため、これを“実践の状況”とした。グループ1の“特性や強み”からグループ2の“実践の状況”への実線矢印は、地区内養護教諭や学校内の上司や教諭、学外の専門家との連携を意図的に行うという【一人配置による課題を一人で抱え込まない工夫】や、大都市とは異なる、顔見知りの同僚や地域に生活している地域特性に精通している、すなわち【地域特性・メンバー特性を熟知している中での活動】という強みがあっても、養護教諭の取組みに伴う限界や不安は拭えず、その現場の状況に対応する活動とつながっていることを示している。このように、他のグループへと質の異なるものへつながり発展しているため実線で表した。

グループ3は、【地区内リーダーとしての努力】、【養護教諭の質の向上を期待】、【研究への負担感/前向きな姿勢(両価的な思い)】の3つのカテゴリであり、いずれも地区内の管理的立場から語られた内容であったため、これを“管理的立場にある養護教諭としての努力や思い”とした。グループ2の“実践状況”からグループ3の“管理的立場にある養護教諭としての努力や思い”への実線矢印は、一般的な養護教諭の役割に留まらず管理的立場にある養護教諭としての役割意識へと広がっていることを示している。ここの矢印も、他のグループへと質の異なるものへ広がり発展しているため実線で表した。

5. 考察

5.1 管理的立場にある養護教諭の語りから得られた取り組みと課題の構造

図1は管理的立場にある養護教諭の語りから得られた取り組みと課題の構造も示しており、以下、グループ毎に、養護教諭の取り組みと課題の構造から考察されたことを述べる。

5.1.1 グループ1：“特性や強み”

“特性や強み”は、カテゴリが5つと最も多く、内容的には管理的立場ではなく一般的な養護教諭に共通する取り組みや課題であった。このことから、まず一般的な養護教諭（以下、養護教諭とする）としての取り組みと課

題があり、その他に、地域や校種などの違いによる取り組みや、管理的立場にある養護教諭の取り組みと課題があると考えた。そのため、管理的立場にある養護教諭の語りから得られた取り組みと課題の構造では、“特性や強み”は独立したグループとして位置づけた。

養護教諭は1人配置であるという職制から養護教諭としての基本的取り組みが派生すると考える。本調査においても1人配置の養護教諭が多かったが、地区内養護教諭や学校内の上司や教諭、学外の専門家との連携を意図的に行うという【一人配置による課題を一人で抱えない工夫】は養護教諭の中核的特性とした。また、A地区の養護教諭は、結束力のある地元出身者で異動があってもメンバーが変わらないことから、協力的な関係性と地域を受け入れ支えながら活動が出来るという【地域特性・メンバー特性を熟知している中での活動】はA地区の強みであるとする。

“特性や強み”の5つのカテゴリの構造は、上記2つのカテゴリが養護教諭職制とA地区特性であり、A地区の養護教諭の取り組みを規定する最も土台となるものであると考えるため1つのまとまりとして括りグループ内の中心に据えた。

以上のような取り組みを規定する特性や強みに支えられ、養護教諭は学校の中で健康に関する小さなことへの地道な対応を行い、慌しい保健室の中でも重篤な疾患のある生徒を見逃さない、生徒の生活の様子や保健室来室状況の変化から新たな健康課題を発見するという【些細な変化を意識した活動】が行えていると考える。そのため、【一人配置による課題を一人で抱えない工夫】と【地域特性・メンバー特性を熟知している中での活動】の土台の上に【些細な変化を意識した活動】を位置した。

【些細な変化を意識した活動】は、養護教諭は健康を守り増進させるという医療保健と、成長発達段階の子どもたちの人格形成といった教育に携わる教員の二つの側面も持っていることから、日々の生徒たちに対する広い観察が行われ、観察された出来事へ医療保健的対応と教育的対応が怠りなく行われているからであると推測された。その対応の中には、【些細な変化を意識した活動】から【専門的な発言による対応】へ破線矢印を示したように、養護教諭は専門職として学校行事や学校の方針へも大きな影響を及ぼすような発言を行わなければならない判断に迫られ、対応を中心的に行わなければならないという課題があることから、一人配置での専門家としての役割の重さや意識や葛藤があることが考えられた。また、【些細な変化を意識した活動】から【外部資源との連携が大事】へ破線矢印を示したように、学校内では解決しない様々な学校生活上の問題に対しての外部資源との連携には、課題が多く苦慮していることが推測できた。上記2つの破線矢印は、同一グループ内の【些細な変化を意

識した活動】の内容によって養護教諭が、校内か校外かという対応の選択に迫られる取り組みの課題であることを示しているため実線とは区別した。

高等学校において、保健室における一人あたりの年間の利用件数は平均3.0回、1回でも利用したことがある子どもの割合は60.7%である⁴⁾。また、1日の平均保健室来室者数は、それぞれの学校で在籍生徒数が異なることから、1日あたりの保健室来室者数を在籍生徒数で除した指数では、1日あたりの保健室来室者指数が2.1～3%の学校が23.2%、続いて1.1～2%の学校が20.8%、5.1%以上の学校が17.3%の順で多く、来室理由は人間関係が最も多く、続いて腹痛や下痢、嘔吐症状、頭痛の順であった⁶⁾。保健室来室者の対応時間は、高校生で平均21.8分であり¹⁾、日々多くの生徒が身体、心身症状など多岐の理由で保健室を利用し、養護教諭はその都度、本調査で明らかとなった【些細な変化を意識した活動】にも含まれる、生徒のちょっとした問題や小さなことの訴えに対応しながら、些細な変化を観察し、生徒の健康情報を蓄積していると考えられる。保健室記録に関する調査では、57.8%の養護教諭が来室した子ども本人に記録を書かせていた⁷⁾。その理由は、高等学校では、8割以上の養護教諭が子ども自身に健康問題を振り返らせるためとし、53.6%が子どもの気持ちを表出させる手段としてであった。保健室来室者記録の作成根拠は法律等で明確に定められていないが、4割の養護教諭が記録の改善を希望しており⁷⁾、子どもの心身の健康問題に早期に気づく手立てを模索していると考えられる。また、救急対応では、女子より男子が多く、課外指導や教科体育で多く、7時以前18時以降の発生が多いとの報告があり⁸⁾、養護教諭が不在時のファーストエイド、安全管理と指導の充実、救急処置体制には不備が多く、学内唯一の専門家として学校組織の活用や外部の専門機関との連携体制の構築は急がれる重要な課題であると考えられる。

また、生徒の健康問題の解決には、単に個人の課題としてとらえるだけでなく、学校、家庭、地域の連携の下に組織的に支援することが大きな意味を持つことに留意する必要がある¹⁾と指摘があり、養護教諭は周囲への効果的な情報提供や、日々の取り組みが関係者に理解されるような働きかけ、つまり【専門的な発言による対応】が求められると考える。更に、先行研究においても、健康課題の解決に向けた健康教育が実際にはうまく回っていない、関係機関との調整が困難な背景、学年進行に伴い、精神保健の問題を親子や教職員が抱え込むようになる状況が推察されている⁴⁾が、地理的、物理的条件が伴わないや、困難課題の増加、専門性を越える対応事例などから、【外部資源との連携が大事】と課題が抽出されているように、課題解決のための環境調整には限界があることも推測された。

5. 1. 2 グループ2：“実践の状況”

“実践の状況”は、カテゴリが【限界・不安を感じながら役割意識を自覚しての活動】1つであり、養護教諭の活動に伴う様々な現状や葛藤、不安を抱きながらの取り組みであった。強みがあっても、養護教諭の取り組みに伴う限界や不安は拭えない状況があることが推測された。

管理的立場にある養護教諭が語った“実践の状況”は、養護教諭として共通する内容も多いが、学校の事情で養護教諭の活動内容が異なるという多様性がグループ1とは異なる内容であると考えた。この多様性と保健室でできることと専門職との連携の葛藤、慌しい保健室の中での重篤な疾患のある生徒の見落とし不安などから、【限界・不安を感じながら役割意識を自覚しての活動】であることが考えられた。“実践の状況”の多様性はグループ1の共通性とは異なるため、管理的立場にある養護教諭の語りから得られた取り組みと課題の構造では、グループ1と対称的位置に据えた。

強みがあっても拭えない限界・不安は、養護教諭は医療保健職と教員という2つの役割の葛藤プレッシャーがあることと関連するものであると推測された。しかし、限界や不安、プレッシャーを感じながらも、養護教諭としての役割を意識しながら活動しており、その活動の根底には養護教諭自身の自己認識と関連していることが考えられる。先行研究にも、高等学校における養護教諭の自己評価で高い項目は、保健室経営と健康相談活動であり、低い項目は、健康教育の推進、研修・研究態度・能力、医療機関・関係機関と連携であった。また、規模が大きい学校ほど養護教諭の自己評価が低い傾向で、一人で多岐にわたる職務を担当することに困難があると報告されている⁴⁾。更に、自己評価を繰り返していく中で改善点を見出して、実践の質を高めていくことが、結果的に養護教諭の職業的自律性の確立につながるとしている⁴⁾。多様化する健康課題の中で養護教諭としての専門性に基づいた活動を実践するには、自己評価などの実践を振り返る機会を得ることが重要であると考えられる。

5. 1. 3 グループ3：“管理的立場にある養護教諭としての努力や思い”

“管理的立場にある養護教諭としての努力や思い”は、カテゴリが3つであり、内容的には管理的立場にある養護教諭の取り組みと課題であると考えた。そのため、“管理的立場にある養護教諭としての努力や思い”は管理的立場であり、グループ1の一般的立場とは異なるため、管理的立場にある養護教諭の語りから得られた取り組みと課題の構造では、グループ1と対称的位置に据えた。

管理的立場にある養護教諭の取り組みは、地区内情報の共有を重視、養護部会との円滑な関係づくり、地区活性化を願う、メンバーキャリアや時代に合った研修企画

などの【地区内リーダーとしての努力】であり、日々の取り組みを研究的に意味のあるものにする、専門科目を学びたいなど【養護教諭の質の向上を期待】を課題としていた。管理的立場にある養護教諭が研究に対しては、研究に本腰を入れる、小・中・高共通の健康課題研修会が必要、次の研究までの期間が短い、地域が広くて集まりにくいなど【研究への負担感/前向きな姿勢（両価的な思い）】を課題としていた。

これら3カテゴリは、地区内の養護教諭の質の向上や地区の研究に対して、管理的立場にある養護教諭の役割認識の高さや責任感の強さを表したものであると考えられた。そのため、グループ2からグループ3への矢印は、一般的な養護教諭の役割に留まらず管理的立場にある養護教諭としての役割意識へと広がっていることを示している。

また、【地区内リーダーとしての努力】は管理的立場にある養護教諭が他組織との関係や当該する組織の活性化に心砕いている内容であるため、管理的立場から組織を対象としていたと考えた。それに対して、【養護教諭の質の向上を期待】は管理的立場にある養護教諭が当該する地区内の養護教諭の希望に耳を傾けている内容であるため、管理的立場からメンバー個人を対象にしていると考えた。そのため、管理的立場にある養護教諭の語りから得られた取り組みと課題の構造では、【地区内リーダーとしての努力】と【養護教諭の質の向上を期待】を、管理的立場にある養護教諭の両価的側面であると捉えたため横並びの位置に据えた。【研究への負担感/前向きな姿勢（両価的な思い）】は、管理的立場にある養護教諭の役割である研究を主テーマにしているため、【地区内リーダーとしての努力】と【養護教諭の質の向上を期待】のカテゴリの下方の位置に据えた。

養護教諭自身の職務に関する自覚には、自己効力感が大きく影響し、養護教諭10年経験者研修が職能成長に欠かせないとの報告がある⁹⁾。研修が、自己肯定感や職務の価値の実感を得ることに有効であり、効果的なリフレクションには、機会の設定及びメンターや仲間の関係が重要であると述べている。しかし、各都道府県では、地方交付税措置により研修が実施されているが、子どもの心身の健康課題の多様化や養護教諭の役割の拡大に対応した、より体系的な研修を進めるにあたり、研修日数が少なく不十分な状況にあると言われている¹⁾。また、研修に参加した養護教諭は、課題研究の取り組みがもたらす影響について、89.2%が価値ある実践と研究を肯定し、89.1%が専門性を自覚しているとする報告がある⁹⁾。また、現職研修に関して、事例を活用し検診技術や検診方法を実習形式で取り入れることが推奨されている¹⁰⁾。管理的立場にある養護教諭が取り組む事として、多様化した健康課題を解決するために、自己肯定感や職務の価値を実感できるよう、研修設定や研修構成員の調整、事例や実習などを取り入れることが有効であると考えられる。

6. 結論

A地区の管理的立場にある養護教諭が明らかにした養護教諭の取り組みは、顔見知りの同僚の存在や地域特性に精通していることを強みとして、1人配置という職制により多様な人との連携を意図的に行いながら、医療保健と教育の2つの役割から些細な変化を意識した広い観察と対応を怠りなく行っていた。課題は、専門職としての判断や中心となつての対応に迫られる、外部連携の困難さ、養護教諭が不在時の対応や体制の不備、課題解決のための外部環境調整には限界があることが明らかとなった。また、管理的立場にある養護教諭の取り組みは、地区内情報の共有を重視しながら他組織との連携を行い、地区の活性化やメンバーキャリアや時代に合った研修企画を行っていた。課題は、日々の取り組みを研究につなげたり、専門性を深めたりという養護教諭の質の向上を期待し、研究を推進し研修会を企画したいという前向きな姿勢と、様々な現実の困難から研究への負担感という両価的な思いがあることが明らかとなった。

（本研究は、千葉科学大学看護学部第1回看護実践連携研究会で発表したものを加筆・修正した。）

引用文献

- 1) 中央教育審議会編:「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について」(答申).平成20年1月17日,2008.http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/tou shin/1216829_1424.html, (参照2015-09-21) .
- 2) 文部科学省編:教職員のための子どもの健康相談及び保健指導の手引.平成23年8月,2011.http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afiedfile/2013/10/02/1309933_01_1.pdf, (参照2015-09-21) .
- 3) 文部科学省編:平成26年度学校基本調査(確定値)Ⅱ調査結果の概要〔学校調査,学校通信教育調査(高等学校)〕.平成26年12月19日,2014.http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2014/12/19/1354124_2_1.pdf, (参照2015-09-21) .
- 4) 小笹典子,白井永男,高崎祐治:養護教諭の職務実態と自己評価-職業的自律性を求めて-.秋田大学教育文化学部研究紀要,教育科学,66, 7-17,2011.
- 5) 中村恵子,塚原加寿子,伊豆麻子他:心の健康問題をもつ子どもの養護診断・対応に関する研究.新潟青陵学会誌, 5 (3),1-9, 2013.
- 6) 田口禎子,橋本創一,菅野敦他:東日本地域の高等学校保健室におけるメンタルヘルスや発達障害等の相談支援に関する調査研究,東京学芸大学紀要,総合教育科学系,60, 457-463,2009.
- 7) 伊豆麻子,中村恵子,塚原加寿子他:学校における保健室来室者記録の現状に関する調査研究.新潟青陵学会誌,6 (1), 107-115, 2013.
- 8) 海老澤恭子,大森智子,河田史宝:学校管理下における高校生のけがの特徴と20年間の推移-事故防止の視点について-.茨城大学教育実践研究,茨城大学教育学部附属教育実践総合センター編,29, 187- 99,2010.
- 9) 平川俊功:養護教諭10年経験者研修の成果からのリフレクションの意義の検証.東北大学大学院教育学研究科研究年報, 59 (1),381-400, 2010.
- 10) 中島敦子,津島ひろ江:養護教諭の救急処置に関する10年間の文献検討.川崎医療福祉学会誌,19(2), 367-377, 2010.